

ラミなどとの戦いが始まる。南京虫のかゆさは強烈だった。つぶすと異様な臭気を発し、殺しても殺してもどこからともなく現れて、一晩じゅう眠る暇がない。飢餓も大敵だった。わずかな粥と黒パンの食糧、あとは干からびたジャガイモの皮。下痢は命取りにもなったので、その防止のため「炭」を食べていた。栄養失調と疲労により、体力は普通時の五分の一ほどに落ちていた。

父の労働は石炭の採掘作業だった。劣悪な安全設備の坑内、ロシア人囚人も多く、現場には殺伐とした雰囲気のみなぎっていた。しょっちゅう落盤や爆発事故が起き、粉塵もひどく、十二年前、咽頭ガンになったとき父は、「シベリアの採掘作業で石炭粉をいっぱい吸ったからこんな（咽頭ガン）になったんだ」と言っていた。寒さと飢えと疲労で、一夜に何人もの仲間が死んでいくこともあった。酷寒のため遺体はカチンカチンに凍り、白ろうのようになった。「今日の友の身の哀れさ、明日は我が身か」と呆然と虚脱の世界に佇んでいた。そして、それでも「俺達は絶対生きて帰る

ぞ」と必死に仲間と励まし合っていた。

無口で自らをあまり語らなかった父。父が四十五歳の時に生まれた私は、父とは何の接点もなく、父のころなどほとんど何も知らなかった。今回これをまとめることで、父のこれまで生きてきた人生を少しだけ理解できたような気がしている。今日も父は毅然とした表情でベッドに横たわっている。シベリアのつらい日々を思い出すこともあるのだろうか。シベリア抑留を初め、戦争のことを語る人は段々少なくなっていくだろう。しかし、決して忘れてはならないことだ。二度とこのような悲惨なことが繰り返されないように、これらのことを次世代に伝えるため、今私たちは知っておく義務があるのだと思う。

戦闘と抑留体験記

熊本県 井場 寿春

昭和二十（一九四五）年八月九日、私はその日、第

六国境守備隊本部の將校集会所の当番であった。午前九時ごろ、將校の朝食の後片づけが終わり、その日の当番三人で朝食をとろうとしたとき、我々のすぐ上空を飛行機の爆音、それもかなり低空で飛行しているようであった。そのとき、近くの木立の間から機関銃が発射され出したが、その飛行機は何事もなかったように悠々と国境の方面へ飛び去った。

珍しく早朝から演習を始めたものだ、それにしてもこんな場所に高射機関銃の銃座があるとは知らなかったと、そんな話をしていると、「直ちに原隊に帰り完全軍装して中隊本部前に集合せよ」と、伝令による通達があった。帰隊してみると、皆無言で、しかも緊張した面持ちで既に整列を終え、私たちと同じ本部勤務者の準備が終わるのを待っていた。間もなく、陣地内の散兵壕に配置につくように命令が出た。そして、壕にうずくまったまま、昼食はその場で携帯食で済ませ、やがて日も暮れようとしているのに、いいかげん演習はやめて状況終わりにしたらよいのにと、そのときまではソ連との間に戦争が始まったことは全く知ら

されなかった。その夜は蚊の襲撃に悩まされながら、まんじりともせず、その場で夜を明かした。

翌十日はまだ夜も明けやらぬ早朝から、眼下に横たわる黒龍江対岸からソ連軍の砲撃が始まった。不気味な音を立てて陣地内に着弾するようになり、至近弾による負傷者が出るようになった。江上艦から発射された艦砲射撃で、陣地内の砲座は跡形もなく吹き飛んで、その威力のすさまじさを見せつけた。私は弾薬手二人とともに軽機だけを持ってタコ壺に移動した。

日が経過するにつれてソ連軍の攻撃は激しさを加え、戦死者が出るようになった。そのころとなると、ソ連軍の先兵は既に陣地内に潜入しているということ、陣地内の掃討戦もやった。私は最初から鉄帽も帯剣も持たない、言わば丸腰で軽機一丁を頼りに戦闘を続行した。鉄帽のない者は戦死者の鉄帽を拾ってかぶるよう命令が出たので、程度のよさそうなものを拾ってみると、なんと親指のつめ大の穴があいて、しかもベツトリと血が付着している。とうとう最後まで鉄帽は着けずに戦闘を続行した。

そして、我々が守備する瓊瑋陣地の最前線で敵弾飛び来る間、鉄帽もかぶらず塹壕の外に出て、「兵隊は危ないから塹壕の外に出てはならない」と大声で叫んでいる一人の将校がいた。何と、この人こそ浜田十之助旅団長だったのである。後にも先にも旅団長に、しかも間近にお目にかかったのはこのときだけだった。

かくて八月二十一日の朝、後方陣地の上空に珍しい大きな気球が上がった。そして、その日に限ってソ連軍からは何の攻撃も仕掛けてこないで、不気味であった。死闘を続けている両軍に対する停戦の合図だったのである。間もなく中隊本部より戦争終結のお知らせがあり、直ちに塹壕を出て本部前に集合の指示が出された。そこで初めて、既に八月十五日に日本は連合国に対して無条件降伏したことを知らされた。戦死した人、あるいは負傷した人には大変気の毒で、申しわけない気持ちでいっぱいだったが、半面、これで命は助かったという安堵に、中隊長以下、晴れ晴れとした表情であった。

その日のうちに後方の陣地で武装解除を受け、雨の

夜道を、前後左右をソ連兵に監視されながら、夜を徹して孫呉に向け歩き続けた。瓊瑋陣地より孫呉まで約六〇キロ弱、翌日の午後には集結地北孫呉の元師団司令部に到着し、早速戦場整理が始まった。孫呉駅付近に集積された膨大な軍需物資、特に食糧となる穀類の貨車積み込み作業であった。

そして九月十五日、その日は一面真っ白い霜の朝だった。我々千人の梯団は、団長に六国歩兵隊第一大隊長松沢大尉、行く先は言わずと知れた懐かしの祖国へ復員するため、歩いてシベリア鉄道までたどり着き、そこから汽車でウラジオオへ向かい、船で日本へ帰国する、そのように知らされていた。

皆それぞれ長い道中に備え、使役作業の合間に携帯燃料等を手際よく準備していたようだった。北孫呉より腰屯を通過し、やがて遜河街道を左に折れて、勝武屯義勇隊開拓団付近を通過して、暗くなってから小さな漁船で黒龍江をソ連側に渡った。

孫呉出発以来、食糧の供給は一切なかったように記憶している。九月はすべての農作物の収穫時期であ

る。途中途中のホルホーズで、大豆の刈り取りやジャガイモ掘りを手伝って、それを食糧にする。生臭さを我慢して三粒食べたなら、もはややめられないというので、このとき初めて生の大豆を口にしました。また、あるときは、植えた種イモより収穫したジャガイモの方が少ないと言って、掘り直しをやらされたこともあった。

露営の夜半にかすかに汽笛が聞こえる。シベリア鉄道はもはや近い。「明日あたり汽車に乗り込んでウラジオに向かって帰れるのではないか」と、そんなかすかな希望に元気がわいた。

九月十五日、孫呉を出発して十月二十五日、四十日間歩き続けて、とある山中の鉄道の引込線のある、駅でも何でもないところに、一棟のかなり大きな倉庫のような建物の前に到着して休憩に入った。私は、目の前の建物と言わず、今腰をおろしているさびついた頑丈なレールと言わず、これは当分帰国できないのではないか、そんな悪い予感がした。そして、その予感の中にした。ほどなくソ連側より発表があつて、当分の

間この建物を宿舍として、目の前の山の石の切り出し作業をすることになった。

直ちに作業班を編成して建物内部の整理を行い、建物の外部は有刺鉄線をその日のうちに三重に張りめぐらせた。何のことはない、自分たちが住む収容所をみずからの手で造ったことになる。シベリア第十九地区ブレイヤー収容所である。内部は通路を挟んで上下二段となっている。昔、農家で飼育していた蚕棚そっくりである。床は板張りで、その上にアンペラ一枚が敷き詰められているだけだった。

孫呉を出発するとき千人だった梯団は、いつどこで別れたのか、半数の五百人になっていた。

早速翌日から石切り作業が始まった。朝食が終わると警戒兵に前後を見張られて、作業隊は線路のまくら木の上を歩いて石山に向かう。距離にして二キロぐらいたったろうか。さほど時間はかからないので、昼も食事は収容所へ帰っていた。一日の仕事を終えての帰りには、疲れと空腹で足が上がらず、まくら木にたまたま倒れ、けがをする者が続出した。石山の作業は

山の頂上、あるいは中腹にハッパを仕掛け、我々が帰った後でソ連人の専門家が爆破する。翌日から崩れた岩石を、大きいものはハンマーで割り、小さい石はターチカ（手押し一輪車）に積んで貨車に積み込むためにホームに集積する。木でつくったターチカも手袋もすぐにポロポロになるが、なかなか補給してくれなかった。

私は、比較的若いときから義勇隊員として寒さにはある程度なれていたつもりだったが、シベリアの冬は北滿に比べて一段と厳しかった。しかも、仕事の相手は重くてかたい、そして冷たい。食事は三〇〇グラムの黒パンに粟か高粱のスープに塩味をつけたものを飯盒のふた一杯ぐらいが常食であった。特に日本内地から初年兵として初めてシベリアの寒気を経験する人、あるいは幾らか年配の人たちが、まず最初の冬に栄養失調と寒さのため、毎晩のように眠るように何の苦しみもなく死んでいった。

ある日、夕食にどうしたことか珍しく白米のご飯が出た。皆喜びの余り、その夜は夕食後、演芸会になっ

た。しかし、その後が悪かった。白いご飯で故郷を思い出したのか、その夜半に三人の脱走者が出た。二人は途中で捕らえられ連れ戻されたが、一人は張りめぐらされた有刺鉄線に手をかけたまま警戒兵に射殺され、朱に染まって雪の中に凍っていた。哀れであった。

私は、かねてから念願であった、元駐屯地とシベリア慰霊巡拝の旅を平成四（一九九二）年六月、ある旅行社の案内で心行くまでお参りすることができた。もはや石切り現場と、一年余り後に移動したライチハアの露天掘り炭坑は昔日の面影は全く見られなかった。特にプレーヤーの石切り現場は、頑丈な石材積み出し用のホームは夏草に覆われ、そのまま残っていたが、石山は既に取り尽くされてなく、後日増設されたのであろう碎石プラントだけがほこりをかぶったまま寂しく残され、付近には作業する人影は全く見えなかった。プレーヤー収容所での石切り作業は、私は一冬だけだったように記憶している。その後、同地区のライチハー収容所に移動して炭坑で作業するようになった。

露天掘りである。

当時、ライチハー炭坑の一日の出炭量は日本全土の炭坑のそれとほぼ同量だと言われていて、天候のいかんにかかわらず、大型の電気シャベルがうなりを上げて、三十トン貨車に積み込んでいた。

私どもがこの地に来てまず思ったことは、当分帰国の望みはないから、思い切り働いて日本人の意気を示そうではないかと、二十五歳ぐらいまでの若者三十人ぐらい、それも九州出身の者だけで作業突撃隊を編成して、がむしゃらに働いた。主に石炭を運び出す線路の移動、補修、点検で、割と技術を要する仕事だったので、ノルマの達成率が高く、毎月、決まった額ではないが給料をもらって恵まれた抑留生活を送っていた。

昭和二十三年ごろになると、次第にソ連の国力が回復したのか、我々抑留者の給与も幾らか改善されてきた。そして二十三年の夏近くになって、我々の収容所からも健康な者の帰国が始まり、残留者の盛大な見送りを受けてナホトカに向け出発するようになった。私は

その年の八月下旬、作業隊の中から選抜されて、幾人かの帰国者とともにナホトカに集結し、一週間程度のナホトカ収容所内の各施設の使役などに従事しながら、帰国船の入港を待った。

二十三年の九月一日、日の丸の旗をなびかせながら入港した永徳丸に乗船して、九月三日、舞鶴港に上陸、丸三年の抑留生活に終止符を打つことができた。

もともと農家の長男であった私は、復員後は家業に専念していたが、昭和二十九年の夏、請われるまま地元の農協に勤務して、その傍ら家内とともに農業を続けていたが、昭和五十六年、家内の病死後は、私一人で少しばかりの農地にしがみついています。祖先伝来の土地を守るなどとそんな殊勝な心がけではなく、農に生まれ、農に育ち、そして農に終わっていくことは、私自身の生きざまとしてはごく自然の成り行きだと思っております。

今では息子夫婦と三人の孫に囲まれ、ささやかながら幸せな余生を送っております。